

聖歌

聖きよきみくに

聖きよき啓しめし示かうを被かむりて

三さん摩ま耶やの窓まどし開ひらくれば

清きよきみ天そらは朗ほがらかに

常とこよ世よのみ国くに現あらはれぬ」

雲くもに聳そびゆる高たか楼どのは

金こがね銀しろがねまに真しんじゆ珠

瑠る璃り宝ほう石せきの莊しょう嚴ごんの

照てり輝かがやく事こと窮きわみなく」

七ななつの宝たからの池いけ見みれば

八やっの功くどく徳とくの水みづみてり

金こがねの沙さいはきらゝかに

す おも て とほ
清める面にぞ照り徹る」

たから うゑぎ たま えだ
宝の樹は玉の枝

こがね はな さき
金の花は咲にほふ

あそ たのしみ
みそのに遊ぶ樂は

むい みやこ はる
無為の都の春ながし」

あまをとめ くも わ
天つ乙女は雲を分け

かな たへ
奏づるしらべ妙にして

おと たのし
ひびける音の樂さは

み とこ おほ
身のをき處も覚ほえじ」

ひび むたび はな あめ
日々に六度の花の雨

こがね には
金の庭にぞふりつもる

やまぶきさなが
きしの山吹宛らに

いづれ いろ
何の色ぞとまがふらめ」

さまや むしろ ざ しめ
三味の筵に座を占て

あふ まつ あみ だそん
仰ぎ奉れば阿彌陀尊

うしつ みどり そら
烏瑟の緑は天にこい

ごせん がうくわう
五山の毫光かがやける」

こがね すがたたへ
金の相好妙にして

つき かほ まどい
月のみ顔は円かなり

たか みいつ おいそ
巍き威儀は厳かに

よろづ とく み
萬の徳は満ちみてり」

ぼさつ たへ のりのみ
菩薩は妙なる法身に

あとくそな
おのおの威徳備はりて

によらい めぐ よそほひ
如来を繞りし装は

くも つき
雲の月をかこむごと」

む ゐないおん さかひ
無為泥洹の境には

のどけ うむ はな
長閑さ有無を離れにき

だいひしん くん
大悲心に薰じてぞ

ぶんしんりもつ きは
分身利物の極なけむ」

なむ ぶつなむ
南無あみだ佛南無あみだ

ぶつ ぶつ
なむあみだ佛あみだ佛

みむね あら
聖意の現はれ

せい みな となへ
聖なる聖名を称ては

みむね あらは あふ
聖意の現れ仰ぐなり

によらい またなきみめぐみ
如来の無上恩寵を

われ こころ みた
我らが感情に満しめよ

によらい しんせい みむね
如来の神聖なる聖意

われ こころ てら
我らが良心を照しませ

によらい せいぎ みむね
如来の正義なる聖意

われ こころ あらは
我らが意志に現れよ

しいしん きよ
至真にしていと聖き

みくに きた
靈国をこゝに格れかし

しいぜん きよ
至善にしていと聖き

みくに きた
靈国をこゝに格れかし

しいび きよ
至美にしていと聖き

みくに きた
靈国をこゝに格れかし

われ はらから
我をすべての同胞と

やす みもと あ
安き靈許に在らしめよ

われら しめい
我等が使命

(天然の美ノ譜)

みどり山々花の雨
やまやまはな あめ

清き泉の湧き溢る
きよ いづみ わ あふ

み国のうちに活かさるる
くに い

我等が幸は極みなし
われら さち きわ

憂きわずらひの巷にも
う ちまた

現はれ給ひみ佛の
あら たま ほとけ

導き給ふみ恵に
みちび たま めぐみ

我等が力限りなし
われら ちからかぎ

一つの業を各自
ひと わざ おのがじし

享けてつとむる生業に
う なりわい

励みはげみて休みなく
はげ やす

我等が進み果てしなし
われら すす は

崇き啓示を胸に秘め
たか しめし むね ひ

雄々おおしき足あしドリ高たからかに

み国くにをこゝにうち建たつる

我等われらが使命しめい量はかりなし

天地てんちに充みつる

一 天地てんちに充みつるみ力ちからは 我れ一人わ いちにんに注そそぐなりイ

ザイザ立たちて使命しめいに生いきん 皆諸共みなもろともに進すすめかし

二 天地てんちに充みつるみ恵めぐみは 汝れ一人な いちにんを救すくふなりイ

ザイザ立たちて望のぞみに生いきん 皆諸共みなもろともに往ゆけよかし

三 天地てんちに充みつるみ意こころは 我等一人われらひとりをたのむなり

イザイザ立たちてみ旨むねに生いきん 皆諸共みなもろともに出いでよか

し

み霊たまよ下りてくだ

(真白き富士の根ノ譜)

一 み霊たまよ下りて迷まよへる我等われらに 尊たふとき啓示しめしを授け給たま

へみ旨むねに答こたへて我身わがみと心こころを 捧ささげて進すすまん眞生道しんせいだう

二 み霊たまよ下りて歎なげける我等われらに たのしき悦よろこび起おこし

給たまへみ旨むねに答こたへて我身わがみと心こころを 捧ささげて進すすまん眞生道しんせい

道だう

三 み霊たまよ下りて悩なやめる我等われらに 雄々おおしき望のぞみを賦あた

へ給たまへみ旨むねに答こたへて我身わがみと心こころを 捧ささげて進すすまん

眞生道しんせいだう

四 み霊たまよ下りて弱よわき我等われらに 正ただしき聖業みわざを為なさせ

給たまへみ旨むねに答こたへて我身わがみと心こころを 捧ささげて進すすまん眞生道しんせい

道だう

ここにのみ佛在して

(軍艦マーチの譜)

一 高根たかねに薰かほる山桜やまざくら 波間なみまにおどる魚うをの影かげ ここに

もみ佛ほとけまし在うちまして 内いのちより生命めぐを恵めぐみます 天地てんちに

在ありと あらゆるもの皆みな 我われに

二 工場こうじやうに渦うづま巻ひとく人の波なみ 渚なぎさに網あみ曳ひく海女あまの群むれ

ここにもみ佛ほとけまし在うちまして 内ちからより力あたを与あたへます

天地てんちに在ありと あらゆるもの皆みな 我われに

三 獄屋ひとやに歎なげく罪つみの人ひと 臥床ふしどに病やみて悩なやむ友とも ここに

もみ佛ほとけまし在うちまして 内ひかより光あたりを与あたへます 天地てんちに

在ありと あらゆるもの皆みな 我われに

四 愛あいと信まことの充みちみてる 社会しゃくわいを創つくる眞生行しんせいぎやう 二

ここにもみ佛ほとけまし在うちまして 内まもより守あたりを与あたへます

天地てんちに在りあと あらゆるもの皆みな 我れわに

生きる悦いびよろこ

(聖きみ国ノ譜)

一 赤あかき光ひかりは空そらに充みち 浄きよき清しみづ水ちは地わに湧わきて

天あめと地つちとに抱いだかれて 生いきる姿すがたの尊たうとけれ

二 われ等らの糧かては与あたへられ 活いき行ゆく道みちは拓ひらかれて

貫つらぬき進すすめと籠こもります 力ちからのみ靈たまうれしけれ

三 地ちに落おつ種たね子ひとづぶの一あふ粒だいちも 溢あふる大だい地ちのふところ

に 抱いだき温あたためはぐくまれ 忽たちまち花はな咲さき稔みのる如ごとと

四 手てに一いち物もつの無なき身みにも 恵めぐみの力ちから注そそがれて 忍しの

びうち克かち努つとめぬき 望のぞみの高たか根かねうち超こえん

五 草くさ刈かり土つち捏こね糸いと紡つむぎ 業わざは賤いやしく貧まづしきも 賦あた

へ給ひし一筋を 命と共に活かしなん
たま ひとすぢ いのち とも い

六 われをみ守り育てます ミオヤに酬ひそひまつ
まも そだ むく

る 道はわれ他共に生く この眞生の大行ぞ
みち ひととも い しんせい たいぎやう

立てよ立て立て
た た た

一 立てよ 立て立て 立ち上がれ おのが 仕事に
た た た た あ しごと

立ち上がれ 生きて 在ます み佛は 蔭より
た あ い まし ほとけ かげ

力を 添へまさん 蔭より 力を 添へまさん
ちから そ かげ ちから そ

二 取れよ 取れ取れ 取り上げよ おのが 鋤鋤
と と と と あ すきくわ

とり上げよ 勇み 働く喜びの 内に 幸ひ 輝
あ いさ はたら よろこ うち さいは かがや

かん 内に 幸ひ 輝やかん
うち さいは かが

三 行けよ 行け行け 行き進め おのが 理想に
ゆ ゆ ゆ ゆ すす りそう

突き進め 行く手 妨ぐ 障碍も 忽ち おのづ
つ すす ゆ て さまた しょうがい たちま

と消え失せん 忽ち おのづと 消えうせん

四 活きよ 活き活き 活き上がれ おのが 使命に

活き上がれ 死して 悔ひなき 聖業に 我が

一生を 果たしなん 我が 一生を はたしなん

掲げて行かん

春の野にさへづる ヒバリのように楽しく 常にみ恵

を 讃へて行かん

夏の海に浮ぶ カモメのように軽く 常に悩みをう

ち超えて行かん

秋の山を染むる モミヂのように赤く 常によろこび

を 弘めて行かん

冬の夜に輝く 月のように清く 常に聖旨を 掲げ

て行かんゆ

捧ぐる祈りささいの

(み霊よ下りてノ譜)

嬉しき時にも悲しき時にもうれかなとき

捧ぐる祈りを酌みて給へささいのくたま

ミオヤよ我等を悩める淵よりわれらふち

導き出して癒し給へみちびだいやたま

尊きみ恵樂しき聖国にたうとめぐみたのみくに

捧ぐる悦び撰けて給へささいよろこうたま

ミタマよ我等を枉れる路よりわれらまがみち

醒め起して進め給へめざおいすすたま

望みに充ちみち栄ある聖業にのぞみほえみわざ

捧ぐる^{ささ} 励み^{はげ}を援^{たす}け給^{たま}へ

ミムネよ我等^{われら}を疾^{やま}しき蔭^{かげ}より

奮^{ふる}ひ立^たたして往^ゆかし給^{たま}へ

眞生^{しんせい}の歌^{うた}

(谷口春沙都氏作)

一 尊^{たう}とみ佛^{ほとけ}み佛^{ほとけ}よ けがれ悩^{なや}みも浄^{きよ}めしめ 聖^{たか}き

みむねやどりて 眞生^{しんせい}を得^えさせ給^{たま}へ 身^みと心^{こころ}ささ

げん 眞生^{しんせい}を得^えさせ給^{たま}へ

二 弱^{よわ}きわれ等^らもみ光^{ひか}りに 望^{のぞ}み力^{ちから}に充^みちみちて

常^{つね}に励^{はげ}み向^{すす}上^{すす}みて 眞生^{しんせい}に生^いきん生^いきん 身^みと心^{こころ}

ささげて 眞生^{しんせい}に生^いきん生^いきん

三 われ等^らすべての同^{はら}胞^{から}に み旨^{むね}み惠^{めぐ}伝^みへてぞ

大地ここのくににみ国くにきたさん 眞生しんせいの浄土みとちきたさん 身みと

心こころささげて 眞生しんせいの浄土みとちきたさん

食作法じきさほう

食前じきぜん

眞生しんせいを得えんが為ために今いま此この食じきを戴いただきます。

念佛ねんぶつ 三遍さんべん

食後じきご

与あたへられたる如にょらい来の御みめぐみ恵かんしゃを致いたします。

念佛ねんぶつ 三遍さんべん